

覚せい剤～のりピー事件を考える

夏休みが始まった7月下旬の休日。

中3の次男坊と同級生7人を引き連れて向かった先は
映画「ごくせん THE MOVIE」。

覚せい剤密売組織のボスに向かって

「確かにお金は大切だよ、しかしお金以上に大切なものがあるんだよ！」

「こいつらは、こころでつながっているんだよ！」

仲間由紀恵（ヤンクミ）の熱いセリフに、引率した大人の私が一番感激して
いたようで...

映画に「連れて行った」のではなく、「付き合ってもらった」みたい...（恥）

そして8月。

飛び込んできた「酒井法子、覚せい剤使用で逮捕」のニュース。

酒井法子と言えば、「一つ屋根の下」「星の金貨」のドラマ。

リアルタイムに見ていました。

ドラマの中の彼女には、温かい母性を感じたものです。

しかし、清純派女優・酒井法子と現実の彼女は大きくかけ離れていました。

ドラマでのイメージがあるだけに、余計にショックを受けましたね。

日頃、皆さんには「テレビやマスコミからの情報を鵜呑みにしないように！」
と偉そうにアドバイスしながら、ショックを受けるとは...トホホ。

彼女がなぜ覚せい剤を使用するようになったのか？

週刊誌を何年かぶりに買い求めました。

ワイドショーでは連日、証拠隠滅のための逃走ルートや今後の刑罰はどうなる
など放映していましたが、私、そんなことには興味ないんですよ。

「なぜ」覚せい剤に手を染めてしまったのか？

この「なぜ」の部分を探求したくて、週刊誌を手に入れました。

週刊誌では「ダメ男と出会った女優の悲劇」。
確かに結婚していなければ、覚せい剤との縁もなかったのかもしれませんが。
では「なぜ」そんな男に魅力を感じ、結婚したのか？
「なぜ」遊び人のダメ男に惹かれてしまったのか？
それでは太田記者が検証します。

検証1．自分が自分でわからなくなる

女優業は本当の自分を隠して、偽りの自分を演じる仕事です。
「清純派アイドル」というレッテルを貼られ、本当の自分がどんどん隠れて
いってしまったのでしょうか。

数ヶ月前にはスマップのメンバーが、真夜中に公園で全裸になり警察に連行さ
れるという事件がありましたね。
温厚なキャラクターとは裏腹に、チンチン裸になって...（冷汗）

本当の自分を隠して、イメージ付けられた役を演じていると、人は「おかしく」
なってしまうのかもしれませんが。
腹を立てず、怒らず、いつもニコニコなんて無理でしょう。
「清純派」のレッテルに、相当くたびれていたと思うんですね。

そんな時、「自分らしく」「自分の思うままに」生きている男性と出会い、魅力
を感じた。「自分にはないものを持っている！」「こんな生き方もあるのか！」と。
彼は自由人。ゆえに、相手を束縛しない。
「もっとこういう発言をしてくれ！」「もっと笑顔を！」など、所属事務所から
命令・束縛されてきた。しかし、彼は何も自分に要求しない。あるがままの
自分を受け入れてくれる。
きっとそうした彼に「居心地の良さ」を感じたのでしょうか。
しかしその居心地の良さが、やがて覚せい剤に...

「どうして成績優秀な生徒会長が、両親を刃物で刺すなんて...」
「どうして公務員で生活は安定しているのに、援助交際なんか...」
「どうして警察官なのに、飲酒運転で逮捕されるのか...」

こうした日々、新聞を賑わす事件も、すべて「ストレス」からでしょう。
自分らしく生きることができないストレス。二重人格的生活。
そこに、ふっと「間（魔）が差す」。

ストレスの対処法を間違うと、奈落の底へ転落してしまいます。

検証 2 . 生い立ち

酒井法子の生い立ちを週刊誌で知って、誤解を恐れずに言えば、私は彼女に慈悲心を覚えました。

かわいそうな女性です。

そして改めて、「母性」の重要性を感じました。

酒井法子には「3人」の母親がいた。実母と継母2人。

その実母は、夫（酒井法子の父）が暴力団で服役中に、乳飲み子の娘をお寺に預けて男性と駆け落ちした…。つまり酒井法子は「捨て子」だった。

その後は、父の妹夫婦の家で育てられる。「里子」でもあった。

父親は出所後に再婚。それが2人目の母。3人暮らしが始まったが、しかしその生活も長くは続かない。母の妊娠中に父親の浮気が発覚。結果、離婚。

その浮気相手が、3人目の母となる。当時、酒井法子小学6年生。

芸能界にスカウトされたのは中学3年、14歳の時。上京して事務所の社長宅に住み込み、翌年デビューした。

産みの母である実母の駆け落ち。父の度々の離婚再婚。継母は父の浮気相手。

不安定な幼少時代は、大人の彼女をさらに不安定にさせます。

誰が自分のほんとうの親なのか？ 自分の安住の地はどこに？

計り知れない「不安」。

親の因果が子に報い…。彼女は、ある意味「被害者」だと言えます。

なぜ覚せい剤を始めたのか？

取り調べに彼女は「仕事の疲れがいつべんに取れるから」と話したようです。

しかし、私は思うのです。

「不安だったから」「淋しかったから」だと。

身体の疲労よりも、「こころ」が極限に疲れていたのだと思います。

食事と睡眠で身体の疲れは取れても、「こころ」の疲れは取れません。

こころが極限に疲れた時、人は無意識に「ぬくもり」を求めます。

それが「家族」であり、「母なるもの」です。

しかし彼女には、その「温かい家庭」がなかった…。

「こころ」を育ててくれる「人生の師」との出会いもなかった。

その疲れた、冷え切った「こころ」を満たしてくれるもの。

それがクスリ、覚せい剤だったわけです。

だからと言って、覚せい剤使用が許されるわけではありません。
しかし「どうしようもない最低女」と、彼女の表面だけを見て、蔑むだけではいけないと思うのです。

大人の目線で冷淡に善悪の判断を下す前に、子供のころの「奥」にあるものを見抜いて更正へと導く。

だから、私、ごくせんのヤンクミの生き方が大好きなんですよ！（笑）

「狼少年」の話（イソップ物語）があります。

「狼が来たぞ！」と、いつもウソをついていた羊飼いの少年。大人が騒ぐのがおもしろくてウソをついていたが、やがて愛想をつかさね、相手にされなくなった。ある時、ほんとうに狼が来た。少年は「狼が来た！助けて！」と懸命に叫ぶが、誰にも信じてもらえず、羊は狼に喰われてしまった…。

「ウソをついてはいけない」という寓話ですが、「ウソをついて大人をだますから、ひどい目に遭うんだ！」という考え方は、「浅い」と思うんですね。

なぜこの少年がいつもウソをつくのか？

「なぜ？」と考える配慮が今の世の中には欠けています。

なぜウソをつくのか？

この子は親の愛情を知らない、大人に無視された淋しい子供ではなかったか？

愛情に飢えたところが、「狼が来た！」という叫びになったのではないか？

この子の気持ちを理解して、愛情をかけてあげる大人が身近にいたら、問題行動を起こすことはなかったのかもかもしれません。

酒井法子もそうです。「よ～し、大人になったら覚せい剤やるぞ～！」と思って生まれてきたのではないでしょう。

周りに愛情深い、智慧のある大人がいなかったのです。

彼女の大ヒット曲「碧いうさぎ」の歌詞の中に

碧いうさぎ ずっと待ってる 独りきりで震えながら

淋しすぎて死んでしまうわ 早く暖めてほしい…

とあります。

まさに彼女の、幼少時代の、悲痛な「叫び」です。

そして今、「親になる」ということはどういうことか？

改めて考えさせられます。